

収録・解説 酒井董美

語り手 山口忠光さん

(明治40年生まれ)

昭和63年8月19日収録

あらすじ

昔、物持ちの家に女の子が3人あって、みな器量よしだった。

奥の池から蛇が化けて出て「娘さんをもらえんでしようか」って。一番姉さんも次のお姉さんも「行かん」て言う。一番下の娘さんが「わしが行くので、お父さん、町に行つて法華経の本を買つてきてください」。

「よしよし」とお父さんは町で法華経の一番難しいのを買ってきた。娘は、奥の池に行つて、ほとりでお経の本を一生懸命読んでた。

池の水が泡になって上

鴻池の嫁になった娘

(東伯郡三朝町大谷)



イラスト・福本隆男

蛇婿入り話が微妙に変化

湖の中へ沈んでしまった。娘さんは帰るわけにはいかんし、普段着のまま出たら、とうとう大阪まで来た。

がって、蛇が角を生やして娘のとこへ寄ってきたので、読んでおった法華経の本を投げたら、蛇のよう頼んだら、よろしいお経の本を読んどった。頭へ当たり角が落ちて、ちゆうこことになった。昼して帰つてきて、灯がと

はぼろを着て、髪もよつた。娘さんは帰るわけにはいかんし、普段着のまま出たら、とうとう大阪まで来た。湖の中へ沈んでしまった。娘さんは帰るわけにはいかんし、普段着のまま出たら、とうとう大阪まで来た。

も起きてこん。若旦那、起きなさい」と言っても起きん。

「食事もほしくない」。それからお医者さんに診せたら「これは薬を飲んでも治りやあせん。この家に好いた女がおるじゃろ」と。

解説

それから連れて行つて、祖父からよく聞いた話だったとのことである。関敬吾『日本昔話大成』本格昔話の「婚姻・異類簪」の「蛇婿入」と

「食事もほしくない」。それからお医者さんに診せたら「これは薬を飲んでも治りやあせん。この家に好いた女がおるじゃろ」と。

こんどは家内のうちであれこれと聞き合わせてみるけど、全然話にならない。それで女中を次から次へと呼んで、若旦那のところにお見舞いに行かせるけど、うんともすんとも言わん。とうとう最後、その娘になって、「若旦那に会つてくれ。」だめですと言つたけど「おまえが一人になつとるんだから、残すわけにはいかん」。

(元鳥取短期大学教授)

(水曜日に掲載)